

緩和ケア室

1. スタッフ（2024年4月1日現在）

室 長（教授）	岡島 美朗
医 員（助教）	瀧澤 裕
	前田 悠希
	安達 迪子
看 護 師	森山 海美（専従）
	大久保ゆかり（兼任）
	大西由紀子（兼任）
薬 剤 師	中川 朗宏
	田中 祐介
公認心理士	馬場 知子
	飯塚 彩
作業療法士	岡本阿由美
管理栄養士	村越 美穂
医療ソーシャルワーカー	大塚 智秋

2. 診療科の特徴

- ・日本緩和医療学会専門医
瀧澤 裕
- ・緩和ケア指導者研修会修了者
前田 悠希 他 2名
- ・精神腫瘍学指導者研修会修了者
岡島 美朗
- ・がん化学療法看護認定看護師
森山 海美
- ・がん性疼痛看護認定看護師
大西由紀子
- ・緩和ケア認定看護師
大久保ゆかり
- ・緩和医療認定薬剤師
田中 祐介

3. 診療実績

- 1) 外来新規介入者数 64名
- 2) 入院新規介入者数 105名

4. カンファレンス

火曜日 オピオイドラウンド
金曜日 症例検討会
月曜日（隔週）
症例検討会、運用会議

5. 部門・部署ごとの事業計画

- ・目標に対する2024年度の達成度
緩和ケア研修会を1回開催した。また、就労支援

（お仕事継続、就労相談会）を18回開催し、のべ22名が利用した。また、患者向けがんサロンを4回で開催し、のべ23名の参加があった。

- ・地域がん診療拠点病院の維持に向けた緩和ケア活動のさらなる充実（苦痛のスクリーニングの実施、診断時からの早期緩和ケアへの取り組み）
- ・心不全患者への緩和ケア介入
- ・緩和ケアの啓蒙活動
教職員への講演会は実施できなかった。
- ・日本緩和医療学会認定施設認定
- ・2025年度の目標：診療の充実（心不全など非がん患者に対する緩和ケア介入の充実を含む）、意思決定支援の取り組みの強化、アドバンスケアプランニングにかかる指針の策定・実装、研究・学会活動の活性化、院内におけるオピオイド系鎮痛薬の適正使用にむけての一層の取り組み（オピオイド変更のためのマニュアル整備）。

外来化学療法室

1. スタッフ（2024年4月1日現在）

室 長（教授）	鈴木 浩一
医 員（助教）	市田 晃佑
看 護 師	16名（認定看護師1名）
薬 剤 師	3名（認定薬剤師2名）

2. 診療科の特徴

外来化学療法室（オンコロジーセンター）は外来棟新設に伴い、2017年5月に開設されました。ペインクリニックと緩和ケア室が併設された、当センターの外来癌診療の拠点となる施設です。

抗がん剤治療の多くは外来通院で行えます。大腸がん、胃がん、乳がん、肺がん、婦人科がん等多くのがん患者さんが入院する事なく外来通院で抗がん剤治療を行っています。吐き気や食欲不振、しびれや痛みなどの症状は支持療法によって緩和され、仕事の継続や日常生活の維持が可能です。外来通院によるがん診療の拠点部署が外来化学療法室です。

抗がん剤治療は日々進歩しています。新しい薬剤の導入によって治療成績は向上し、副作用を軽減させる支持療法の開発によって生活の質を落とすことなく治療が継続できるようになりました。それは、専門性の高い知識を持った医療従事者が集まり、組織の枠を超えてチームを結成し、チームが一丸となってがん治療に向き合うことによって実現されました。新たな薬剤の知識はすぐさまチーム内で共有され、効果的な薬剤や最適な支持療法がチームで決定され患者さんに提供されます。

外来化学療法室では、1日70-80件、1ヶ月800-900件程度の抗がん剤治療を行っています。ペインクリニックや緩和ケア室も併設され、痛みのコントロールや心理的サポートなど、がん患者さんの全人的なケアを行っています。

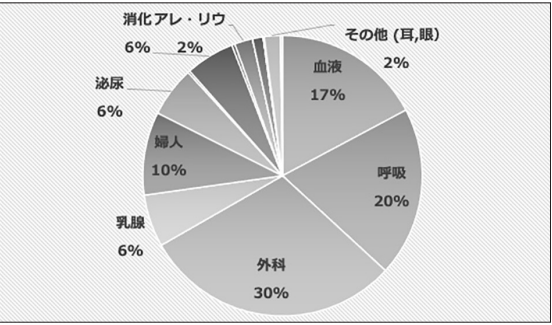
当センターは「地域がん診療連携拠点病院」に指定され、地域におけるがん診療の中核的な役割も担っています。「地域がん診療連携拠点病院」の役割は、

1. 専門的ながん医療の提供
2. 地域における診療連携協力
3. がん患者さんに対する相談支援および情報提供、
4. 院内がん登録への情報登録および利用です。

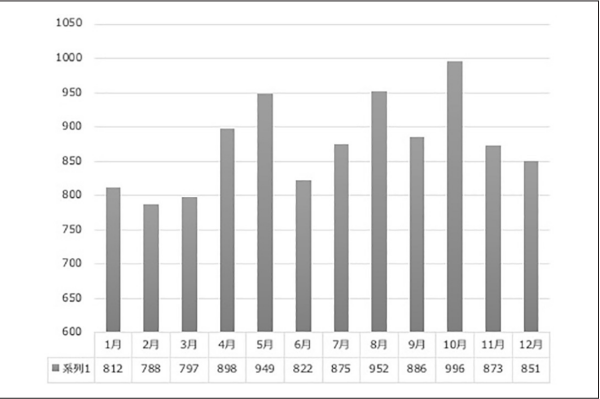
地域のがん診療の拠点病院として、地域の皆様に質の高いがん医療を提供するとともに、その情報を公開することで患者さんが安心して治療を受けられるよう努力しています。さらにその質の高い医療を地域全体で切れ目なく提供できるよう地域連携を強化し、医療の均てん化を目指しています。

3. 診療実績

診療科の内訳（2024年）



患者数の推移（2024年）



4. カンファレンス

カンファレンス（2024年）

1月18日	外科・消化器内科	市田先生・関根先生	相談症例の治療経過・振り返り（報告）
1月30日	消化器内科	今井先生	相談症例（議事録あり）中咽頭がん術後、表在食道がんの内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）後、骨転移の疑い。骨転移の可能性と評価方法について
2月15日	外科・消化器内科	市田先生	今井先生の治療経過報告（前回の相談症例）市田先生：肺がん・食道がんのdouble cancerで多発リンパ節転移は、食道がん由来かどうか今後の治療方針：レジメン選択など
3月21日	呼吸器内科	齋藤先生	相談症例（議事録あり）縦断型胚細胞腫瘍。術前化学療法でBEPを行う予定。泌尿器科・病理・放射線科等に相談追加検査、放射線照射・評価方法について→泌尿器科へ紹介
4月18日	消化器内科	関根先生	肺癌（12/5）の症例：治療経過と今後の方針
5月16日	婦人科	近澤先生	原発不明がん？膀胱腫瘍、卵巣がんの疑い。右上葉肺腺癌もあり。治療の優先順など
6月20日	消化器内科	関根先生	肝内胆管癌、肺がん症例：今後の化学療法、肺がん治療か間質性肺炎か、
7月18日	血液内科	木村先生	悪性リンパ腫に関するレクチャー
8月22日	外科	鈴木浩一先生	遺伝子パネル検査の導入と進捗状況：レクチャー
9月19日	呼吸器内科	齋藤先生	6/20の消化器内科からの症例：呼吸器内科転科の継続、治療経過
10月4日	皮膚科	松坂先生	子宮頸部悪性黒色腫：病変部の診察・管理方法、放射線治療の可能性、子宮全摘手術の適応などの確認
10月17日	外科	斎藤正昭先生	血液疾患、間質性肺炎を併発した胸部食道がん：治療方針
11月5日	消化器内科・外科	①上原②市田先生	①肺癌の多発肝転移か肺原発の精査、治療方針②胃がん・腹膜播種に対しての肺高血圧症：化学療法再開時期、肺高血圧症の原因
11月14日	中止		
12月19日	泌尿器科	宮川先生	ICI・irAE（心筋炎・脳炎疑い9関連）のレクチャー

5. 事業計画

- ・ 外来化学療法室の体制整備
- ・ 癌拠点病院の施設認定の体制維持
- ・ キャンサーボードの運営
- ・ 病病連携、病診連携、薬薬連携の促進
- ・ 研修・人材育成
- ・ 学校での教育開始
- ・ 検診の普及・啓蒙
- ・ 専門的ながん医療の提供
- ・ 地域のがん診療の連携協力体制の構築
- ・ がん患者に対する相談支援及び情報提供
- ・ がんゲノム医療の提供
- ・ 小児やAYA世代のがんに対するチーム医療の体制整備
- ・ 妊孕性温存療法に対する、情報共有、体制整備
- ・ がん・生殖医療に対する情報共有、体制整備の充実
- ・ 高齢者のがんに対する機能評価の充実

がんゲノム医療室

1. スタッフ（2024年4月1日現在）

室 長（教授）	鈴木 浩一
室 員（教授）	大城 久
（助教）	市田 晃佑
事 務	箭内 彰
	金井 英美
	今野 渚
その他	20人

2. 診療科の特徴

【概要】

当センターは2023年4月1日に厚生労働省から「がんゲノム医療連携病院」の指定を受け、「がんゲノム医療」を一括して管理する「がんゲノム医療室」を新設しました。各領域の医師、がん専門薬剤師、がん専門看護師、認定遺伝カウンセラー等多職種で構成される組織です。「がん遺伝子パネル検査」を行い、その結果に基づいて最適な「がんゲノム医療」を患者さんに提供します。

【がんゲノム医療について】

患者さん固有のがん遺伝子の変異を特定し、その結果に基づいて行う医療を「がんゲノム医療」といいます。特定した遺伝子変異に対して特化した治療薬の開発により、がんの治療成績は飛躍的に向上してきました。

【がんゲノム医療拠点病院等について】

「がんゲノム医療」を必要とするがん患者が、全国どこにいても「がんゲノム医療」を受けられる体制を構築するため、2018年に「がんゲノム医療拠点病院」が指定されました。当センターは「がんゲノム医療中核拠点病院」である東京大学医学部附属病院と連携し、がんゲノム医療連携病院として、最適な「がんゲノム医療」を患者さんに提供します。

2018年6月にはがんゲノム情報管理センター（C-CAT）が開設され、「がんゲノム医療」の情報収集体制が整備されました。そして2019年6月には「がんゲノム医療」を担う「がん遺伝子パネル検査」が保険収載されました。

【がん遺伝子パネル検査】

当センターでは、2023年6月より遺伝子パネル検査を開始しました。FoundationOne® CDxがんゲノムプロファイル（中外製薬株式会社）とFoundationOne® Liquid CDx がんゲノムプロファイル（中外製薬株式会社）の2種類のパネル検査を受けることができます。

3. 診療実績

2024年1月から12月までの1年間に52件の検査を行

いました。その件数の推移と疾患の内訳、診療科の割合、治療到達薬剤を参考資料に示します。同定薬剤のエビデンスレベル* Aが7例、Cが4例、Eが16例、なしが26例で、治療到達性はエビデンスレベルのつかない治験を含めて17.3%（9例）でした。7例が当院で投薬が行われ、2例が国立がんセンターで治験に参加しました。

4. カンファレンス

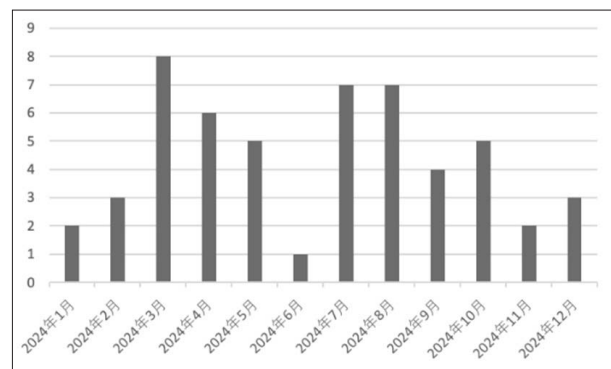
エキスパートパネル 毎週金曜日17:30-

5. 活動

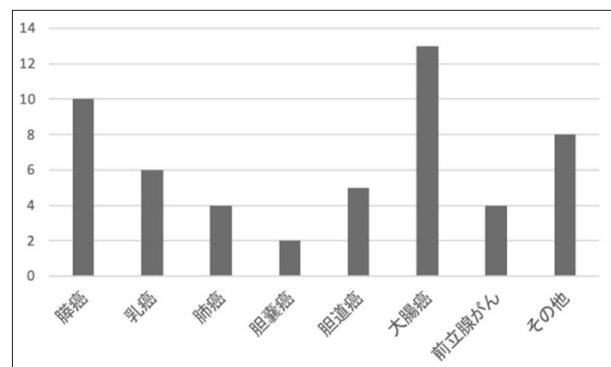
- （1）遺伝子パネル検査
- （2）ゲノム情報の管理
- （3）がんゲノム情報管理センター（C-CAT）への情報登録
- （4）東京大学医学部附属病院で行われるエキスパートパネルへの参加
- （5）遺伝カウンセリング
- （6）がんゲノム医療の情報の周知・共有、研修会や、講習会の開催
- （7）院外への周知

参考資料

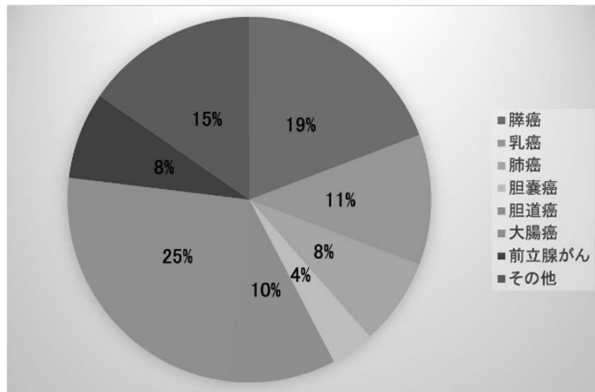
遺伝子パネル件数の推移



疾患の内訳



診療科の割合



治療到達薬剤（9例）の内訳

臨床診断	遺伝子変異	薬剤	エビデンスレベル	投与
肺多型がん	MET	c-Met阻害薬	A	当院
膵NEC	TMB	抗PD-1抗体	A	当院
胃GIST	KIT	Bcr-Abl/PDGFR/c-Kit阻害薬	A	当院
乳がん	PTEN	AKT阻害薬 + SERD	A	当院
乳がん	MSI-H	抗PD-1抗体	A	当院
膵がん	CDH-NRG1	Zenocutuzumab (NRG1融合)	なし	治験
膵がん	AKK-BRAF	MEK1/2阻害薬	なし	治験
肺がん	EGFR	EGFR阻害剤	A	当院
乳がん	PIK3CA	AKT阻害薬 + SERD	A	当院

(*) エビデンスレベル

- A 当該がん種で、国内承認薬がある。FDA承認薬がある。ガイドラインに記載されている。
- B 当該がん種で、統計的信憑性の高い臨床試験・メタ解析と専門家間のコンセンサスがある。
- C 他がん種で、国内またはFDA承認薬がある。統計的信憑性の高い臨床試験・メタ解析と専門家間のコンセンサスがある。がん種に関わらず、小規模臨床試験で有用性が示されている。
- D がん種に関わらず、症例報告で有用性が示されている。
- E 前臨床試験で有用性が報告されている。